

イアン・マキューアン：
The Comfort of Strangers 試論
 ——父権制という「他者」の欲望——

竹 岡 千 代

An Essay on Ian McEwan's *The Comfort of Strangers*
 ——Desire of the Other Signified by Patriarchy——

TAKEOKA Chiyo

はじめに

イアン・マキューアンは1975年に短編集 *First Love, Last Rites* でデビューし、当時の保守的なイギリス文壇に大きな衝撃を与えた。それは作品の内容が人間の異常心理、性的倒錯、退廃を特徴としていたためであった。ただのホラー作家という批判もあったが、ストーリーテラーとして高い評価を受け、サマセット・モーム賞を獲得する。以降、70年代の2作品を同様の題材で描いている。

ここで論じる第4作目 *The Comfort of Strangers*¹⁾ もブッカー賞候補作として、一定の評価を得る一方、それまでの作品と同様、単にサディスティックな男による猟奇的な殺人事件を扱った幻想小説でしかないといったスティーブン・コーク (Stephen Koch) のような否定的な見方も多くなされている。

Stephen Koch, too, faults the plot. . . . "The difficulty is that all this skill is directed toward a climax. . . . After an impressive windup, the sado-masochistic fantasy animating *The Comfort of Strangers* is revealed as . . . a sado-masochistic fantasy. And not much more. . . .²⁾

もちろん、性的倒錯や殺人といった題材は作品の重要な意味を担うが、しかし、それまでの作品にはほとんど見られなかった、正常な登場人物の深層心理が描かれていることを考察する必要があるだろう。マキューアンは5作目以降、人間の異常性を日常に潜むものとして描くようになり、中心的主題も男女のあり方を心理的な側面から追究するものによっていった。その素地として、この *The Comfort of Strangers* を捉えることができると思う。

初めて、マキューアンの作品に関する包括的な評論集を出したジャック・スレイ・ジュニア (Jack Slay Jr.) も、*The Comfort of Strangers* を「おとなの欲望や人間関係を精神的に深く探求している」点で、マキューアンの「成熟」のあとを示す作品と評価している³⁾。

I

The Comfort of Strangers には2組の男女が登場する。イギリス人の Colin と Mary, そして年長の Robert と Caroline である。前者はイギリスから休暇でヨーロッパにある架空の保養地に来ている。離婚して二人の子供がいるメアリと独身のコリンはつきあって7年経ち、やや倦怠期にあるように見える。後者はこの保養地に住む夫婦である。住居をアパートにし、家賃収入で生計をたてる一方、ロバートはバーを経営している。この2組の男女が知り合い、最終的にロバートのコリン殺しという惨劇が起こる。

本論では4人の登場人物の関係と心理的な側面を詳細に検討し、殺人に至った動機を解釈するとともに、どうしてコリンでなければならなかったのかという点を解明したい。

この舞台となった保養地は名前が特定されていないにもかかわらず、ダグラス・ダン (Douglas Dunn) のように、ベニスと想定している批評家が多い⁴⁾。スレイは「驚異と神秘の場所」であるベニスの暗示によって、作品の不気味さが強調されると述べ、他方で、名前をあえて出していない意図は「外国や、見知らぬものを象徴的にあらわす」ためと指摘する⁵⁾。旅行者にとって見知らぬ人々、聞き慣れぬ言葉に出会う異国の地では非日常性、現実感の希薄さは避けられない。そのため、架空の都市という設定には非日常性をより際立たせる効果がある。実際に、この町なかのクモの巣状にはり巡らされた、せまく、暗い、無数の路地は非日常の世界、夢を暗示しているといえる。

コリンとメアリが夢の中をさまよっていることは2人の経験する多くの事象から証明されうる。たとえば、同じホテルに何日も宿泊しながら、毎日、道に迷い、なかなかホテルに帰れない、目的のレストランに行けない、行けたとしても満席であったり、すでに閉まっているという状況が次のように延々と続いている。

Despite the maps, they frequently became lost, and could spend an hour or so doubling back and round, ... and still lost. ... They passed many hours searching for 'ideal' restaurants, relocating the restaurant of two days before. Frequently, the ideal restaurants were full or, if it was past nine o'clock in the evening, just closing; (14)

しかも、日常であれば、簡単に解決できるような問題がどんどん大きくなり、それと比例して、コリンとメアリの焦燥感、疲労感が増大していくことになる。

ロバートに初めて出会うことになったのも2人が夕食をとりに出かけると決めてから、なかなか行動に移さないためであった。「遅くなったからあとであんなことが起こったのだ」とメ

アリは悔やむ(18)。どの店も閉まっているほど夜遅く、開いている店に行くのにどの路地を選べばいいか迷っている最中に、ロバートが現われ、2人はロバートのバーに強引に連れて行かれる。夜更けに、ロバートと別れてからも、道がわからないためホテルに帰れず、町なかで朝を迎える(42)。さらに、メアリの望む一杯の水のために、2人は当てもなく歩き回るが、いたずらに時だけが過ぎていく。日が照りつけるなか、やっと思ったレストランも満席で、2人の疲労は増加する。なんとかすわっても、ウェイターは来ない(43-50)。水の飲めないいらただしさが募るうち、ようやくウェイターが来るが、2人の水の注文に対して、広場の水道栓を指すだけである。2人はうまくことが運ばないたびに休暇に来ているんだからと思い込もうとするが、まるで砂漠のなかで水を求めるかのように、極限状況に追い詰められていく。

Finally, ... they were able to sit, and then it was obvious that the table was on a remote flank of their waiter's territory, ... Mary gazed at Colin with narrowing bloodshot eyes and muttered something through carcked lips that were beginning to swell : (48)

Mary... said, 'A glass of water, without ice.' ... 'Water?' he said distantly. His eyes moved between them, appraising their dishevelment.

He... nodded towards a corner of the square. 'Is a tap.' As he began to move away, Colin... caught his sleeve. 'No, but waiter,' he pleaded. (51)

コリンの必死になって水を求める様子、そして、メアリの血走った目と乾いて割れた唇も切迫した状況をよく表わしているが、マキューアンのたたみかけるような描写が読み手をも不安に駆り立てる。もはや2人が単に観光地の探索を楽しんでいるとはとうてい読みとれない。マキューアンは迷路に入りこみ、出口の見つからない悪夢にコリンとメアリだけでなく、読み手をも引きずり込む。もっと早く出かけていれば、別の路地を選んでいればと何度も、自分たちが選択しなかったことを後悔しているのも非日常を表わす。おそらく、日常の場面でなら選択したはずの生き方を選んでないからであろう。テキストの語り手は「旅行者であっても積み重ねられた選択は意志の結果」(21-22)と突き放すだけである。

また、コリンとメアリが出かける前に「しきたりとして」(12) 互いの夢を話して聞かせるのも、2人が悪夢に陥る予兆ではないだろうか。コリンの夢は空を飛ぶといった「精神分析学者が喜ぶような夢」(12) であるのに対し、メアリの夢は現実と思えるような夢である。とりわけ、危険にある子供を助けたくても助けられない無力感を感じたり、子供からのしつこい問いかけに怯えたりする夢は子供をおいてきた後悔の表われだけでなく、これから2人に起こる出来事のなかでメアリの感じる恐怖やコリンを救えない無力感を見せる予知夢と受けとれる。

道もわからず、食事がとれないまま、2人が途方に暮れていたときも、水さえ飲めず、焦燥感が頂点に達していたときも、救世主のように現われたのがロバートであった。ロバートがどんなに怪しい人物に見えても、極限状況にある2人はロバートに依存してしまう。読み手でさ

え、延々と続いた悪夢の緊張状態を緩める役割をロバートに期待する。しかし実際には、ロバートこそ悪夢の演出家であり、善意の陰で2人を陥れる策略を初めから用意していたことが徐々に明らかになる。その姿はクモの巣状の町に棲息する毒グモ、あるいはスレイのいう、迷宮に閉じ込められていた怪物“sadistic minotaur”⁶⁾に重なり合う。たとえばロバートがコリンとメアリがこの町に着いたときから密かにつけ回し、コリンの写真を撮っていたような事実は惨劇が起こる寸前まで明かされない。

この作品のエピグラフに掲げられたセザール・ペイブス (Cesare Pavese) の「旅は残忍なものだから、異邦人を信じることを余儀なくされる」という引用文はコリンとメアリがロバートを信じる必然性を示唆している。

また、スレイは文学史上の有名な作品の主題として、異国の見知らぬ人を信頼する題材が何度も出てきていることを指摘し、それらと同様に、旅に固有の危険がこのテキストの核となっているので、文学の伝統にマキューアンを位置付けられると考えている⁷⁾。

この町が夢を暗示しているとして、テキストを見てきたが、次章では、「夢とは解釈されるテキスト」と言った精神分析学者ジャック・ラカン (Jack Lacan) の夢の定義からこのテキストを考えてみたい。

II

ラカンによれば夢とは意識には受け容れがたいものとして抑圧され、無意識の側に追いやられた本能衝動や欲動が睡眠による抑圧のゆるみを機に意識に回帰してきた表象である。欲動は無意識に追いやられる際にシニフィアンに置き換えられ、ここで形成された無意識は言語のように構造化されることになり、自分自身にとって他者の位置にある象徴体系とみなされる⁸⁾。つまり抑圧された欲動がシニフィアンに置き換えられ、記載された無意識のメッセージである夢とその夢をみる私との関係は夢をみる意識主体が、その意識主体の存在を支える無意識という他者によって認識されるものと考えられる。また反対に、夢によってメッセージを発信する無意識を、夢をみる意識主体が認識することでもある。

以上の観点から、水、食べ物や休息を求めるコリンとメアリ＝意識主体 (シニフィアン) は2人の前に救済者として現われ、欲求を満たすロバートとキャロライン＝無意識における他者に圧縮、置換されると解釈できる。つまり、2人の陰喩表象 (シニフィエ) としてロバートとキャロラインは捉えられる。そこで、コリンとメアリの意識には受け容れがたい、ロバートとキャロラインの表象するものを2組の関係とそれぞれのカップルの関係を詳細に探ることによって、解明していきたい。

ロバートは確かに救済者として現われるが、親切言葉とは裏腹に、振りほどけないほど強く2人の腕をつかみ、自分の意志を強制する。その強引さはロバートののちに見せる怖さに通じる。

Even as he was speaking the man caught him cordially by the wrist and stretched out his other hand to take Mary's. (26)

But already Robert was on his feet, one hand resting on Colin's forearm, the other reaching for Mary's hand. 'Yes, it is my responsibility. . . . You will accept my hospitality.' (53)

ロバートのアパートに連れて行かれた2人は眠ってしまうが、その間に2人の着ていた服が隠される。外出中のロバートに代わって、妻のキャロラインも服を返すのと引き換えに、一緒に晩ごはんを食べていくよう、かなり強引に2人を引き留める。しかも、2人の眠っている様子を30分近くも見つめていたと告白する。強制的に連れてきて、引き留めるロバートとキャロラインにはコリンとメアリに対する異常とも思える興味が窺える。キャロラインのとった行動は尋常ではない。それゆえ、なにか企みや望みがあるのではないかと当然、疑いを抱いてもいい。しかし、コリンとメアリは押しつけがましさに一応の抵抗はするが、ほとんど疑うことはない。

'Robert is very keen for you to stop and have dinner with us. He told me not to let you have your clothes until you'd agreed.' . . . 'Well, I'm very hungry,' Colin said, looking at Mary who said to Caroline, 'I prefer to have my clothes first, and then decide.'

'That's exactly what I think, but Robert insisted.' . . . 'Please say you'll stay. . . .' (64-65)

ロバートが帰るまで、メアリとキャロラインは2人だけで会話をする (61-63, 66-69)。そのなかで2人の女の考え方の相違が明確に示されていく。お互いの立脚点がかけ離れているため生じる齟齬はまるで違う言語をしゃべっていると思えるほどである。キャロラインにはメアリが好きなコリンと結婚もせず、同棲もしていないことが理解できない。旧来の価値観で考えるキャロラインの質問に対して、メアリの答えは「一緒に住んでないわ」 ('No, we don't' 67) という予想を裏切るものだが、その素っ気ない答え方にうんざりした様子が窺える。メアリは結婚に価値をおくキャロラインに、形にとらわれない関係を説明しても無駄と考えているようである。メアリが以前、所属していた劇団について話すと、キャロラインはメアリが「女優」 ('An actress!' 67) だったと納得しようとする。しかし、メアリが「女だけの劇団」 ('a women's theater' 67) だと言ったため、その劇団の存在すらキャロラインにはとうてい理解が及ばなくなってしまう。男がいなければ存在しない女という価値観は「女だけで芝居をしてどうなるの」、女2人の芝居に関する「2人は男を待っているのよ」といったキャロライン自身の言葉で示される。

'A play with only women? I don't understand how that could work. I mean, what could happen?'

Mary laughed. 'Happen?' she repeated. 'Happen?'

Caroline was waiting for an explanation. ... 'Well, you could have a play about two women who have only just met sitting on a balcony talking.' Caroline brightened. 'Oh yes. But they're probably waiting for a man.' (68)

2人の食い違いはメアリが男優の相手としての「女優」ではなく、あくまで「女」('women')という言葉を使っていることでもわかる。要するに、キャロラインが父権制社会の男に従属する女を内面化しているのに対し、メアリは父権制社会に抵抗を試みているフェミニストと解釈できるのである。

ロバートの社会に対する価値観もキャロラインと同様である。メアリとロバートとが初めて出会った夜に、町で見かけたレイプ犯に関するフェミニストのポスターをめぐって、2人の全く相反する姿勢が露呈される。

'They want convicted rapists castrated!' ... Mary turned back to the poster. 'No. It's tactic. It's a way of making people take rape more seriously as a crime.' (24)

Again he (Robert)... seemed to assume personal responsibility for everything they could read. 'These are women who cannot find a man. They want to destroy everything that is good between men and women.'... 'They are too ugly.' Mary watched him as she might a face on television. (28)

メアリのフェミニストとしての姿勢が打ち出されているのに対し、ロバートの価値観は「こういう女たちは男が見つけられないんだ。男と女のよいものをみんな壊したがる」といった差別的言辭から、父権制へのゆるぎない信頼に基づいているといえる。メアリはロバートが現実存在しているとは思えないほど、対極に位置する。

また、4人で食事をする前に、ロバートはコリンに陳列した祖父、父の愛用の品や、先祖伝来の物の説明をした後、過去の父権制への憧れと現代の男に対する嘆きを述べる。しかし、コリンの共感は得られない。

'My father and his father understood themselves clearly. They were men, and they were proud of their sex. Women understood them too.' ... 'Now men doubt themselves, ... Women treat men like children. ... 'But ... women long to be ruled by men...' ... 'It is the world that shapes people's minds. It is men who have shaped the world. So women's minds are shaped by men. ... Now then women lie to themselves and there is confusion and unhappiness everywhere. ... 'Colin cleared his throat. 'Your grandfather's day had suffragettes. And I don't understand what bothers you. Men still govern the world.' (72-73)

キャロラインとメアリのときのように、ここでもやはり、旧来の父権制社会に価値をおくロバートと現代的な価値観で考えるコリンとのかみあわない会話は同じ言葉のもつ意味が全く異なることによる。ロバートは男が支配し、女が男に従属する世界の衰退を嘆くが、そこには理論も思想もなく、ただ偏った個人的感情しかない。他方、コリンが女権拡張運動家がいても、今だって男が世界を支配していると述べるとき、男性優位の社会構造はなかなか変わらないというフェミニズム的な認識を表わしている。そこで、もうひとつのエピグラフがこのテキストを読む鍵となる。それはラディカル・フェミニストの第一人者であり、詩人のアドリエンヌ・リッチ (Adrienne Rich) の詩の1節である。

how we dwelt in two worlds
the daughters and the mothers
in the kingdom of the sons

(Epigraph)

この詩は父権制社会のなかで、女が母と娘に分離され、別々の世界にいたことを説明する。リッチの代表的著作、*Of Woman Born* は詩の内容を裏付けるものとなっている。リッチは男の支配下の機関として、母性が女から離され、聖性を付与され、女自身の潜在能力を弱めることになったため、女は分離されていた母と娘（子供のいない女）を共に受け容れ、肉体を取り戻し、再統合する必要があると主張している。

To accept and integrate and strengthen both the mother and the daughter in ourselves is no easy matter, because patriarchal attitudes have encouraged us to split, to polarize, these images, ... But any radical vision of sisterhood demands that we reintegrate them.⁹⁾

マキューアンはリッチを引用することによって、スレイが言うように、「破壊的な父権制の支配下にある社会の危険や不合理性を示し、過去から続いている多くの事柄に反抗しようとしている。」¹⁰⁾そして、フェミニズムの父権制に打ち勝つ可能性を示唆するが、結局、コリンとメアリはフェミニズムをもってしても、父権制社会における破壊性の犠牲となっていく。また、この解釈から、抑圧され、無意識に追いやられた欲動はロバートとキャロラインの表象する父権制の不合理な破壊性というシニフィエに置換されることになる。

コリンとメアリが父権制に取り込まれてしまったことを表わすのが2人に突然、訪れた再生の経験である。最後にロバートの家を訪れる前の4日間、2人は片時も離れず、同じベッドで抱き合って眠り、出会った頃のような情熱的なセックスをし、互いの話を新鮮な気持ちで聞き、理解し合う。

... as if, finding themselves reborn through an unexpected passion, they had to invent themselves anew, name themselves as a newborn child, ... (80)

コリンとメアリとの関係は男と女として向かい合う関係ではなく、性差のない一体感が強調される関係として描かれていた。その一体感は2人のセックスが「鋳物が鋳型に戻るような」慣れ親しんだもの(18)であったり、「互いに別の人間だと思ひ出すのはむずかしい」(18)と語っていたり、キャロラインが2人を「双子のようだ」(67)と形容するところなど多くの箇所で見られる。しかし、その一体感は「互いの相違点を再発見するだけで傷つく」(18-19)のようなものでもあった。従って、この再生は一体としての2人が、ロバートとキャロラインによって無意識に抑圧していた父権制の、古い男と女を意識化したうえで、互いのジェンダーを新たに自覚するようになったことを意味する。

次章ではロバートとキャロライン、ロバートとコリンとの関係を検討し、コリン殺害について考えていきたい。

III

ロバートとキャロラインの関係はもちろん、支配と従属の関係であるが、それを象徴的に表わすのが、サディスティック・マゾヒスティックな性関係といえる。ロバートは自分が原因で子供をもてないを知ってから、セックスのときにキャロラインを傷つけるようになった。初めは嫌がったキャロラインもマゾヒスティックな喜びを覚えていく。ロバートの望むまま、「恐いけれど、恐怖と快感はひとつのもの」(109)と考えるまでに自分を変えていく¹¹⁾。どんどん2人の行為は激しくなり、とうとうキャロラインの背骨を折る事態に至る。ロバートの欲望はセックスのときに、キャロラインを殺すことであり、キャロラインは壊してもらいたいと思っているのである(110)。キャロラインが階上にある自分たちの部屋から4年間、出ることなく、先祖伝来の品物を磨いているというのも、父権制社会の男たちに仕えていることを象徴的に物語っている。過去の遺物を陳列するほどの父権制への信奉はロバートの家庭環境に原因があった。ロバートの家庭は父親の権威が絶対的な父権制社会のひな型であった。外交官であった祖父、父の跡継ぎとして長男ロバートは育てられたが、跡を継ぐことはできず、遺品と父権主義だけを糧に生きている。しかも、ロバートが跡継ぎをもてないという事実は父権制の存続さえ危ういものにしている。ロバートがコリンに語った父権制の衰退は実は自ら、招いたものだったのである。そこで、父権制の力の誇示をコリン殺害の動機とすることも可能だが、その場合、コリンでなくても構わない¹²⁾。父権制を脅かすものとしてフェミニズムを考えれば、メアリを標的にする方が妥当である。別の角度からテキストを読めば、コリンでなければならない理由がロバートのホモセクシャル(バイセクシャル)にあると指摘できると思う。

ロバートのコリンに対する言動はホモセクシャルを暗示しており、父権制衰退の一因ともなっている。ロバートは事あるごとに、コリンの腕、肩、髪の毛など体を触ったり、ウイंकを

して見せる。そういったさりげないしぐさはいたるところに出てくる。たとえば，“Robert was massaging Colin’s shoulder gently as he spoke,” (72) といった描写である。それだけでなく、ロバートのコリンへの並々ならぬ思いがはっきりとわかる箇所がある。密かに撮ったコリンの写真を、自分の寝室一面にはっていたこと (113)。ロバートがコリンと腕を組みながら、男しかいない地域を連れ歩き、知り合いに会うとこれはおれの恋人（‘my lover’）だと紹介していたこと (103)。そして、話をしている最中に、ロバートが理由もなく突然、コリンの腹を息もできないほど強く殴ったこと (73) も、サディストと同時に実は同性愛者の側面を見せている。

ロバートがコリンを好きなら、殴ることも、殺してしまったのも不可解に思える。しかし、ロバートとキャロラインの関係で見たように、ロバートの究極の欲望は好きな相手を殺すことなのである。キャロラインがメアリに述べた「だれか男の人を好きになったら、どんなことでもする——殺されてもいいと思う」と同時に、「もし、私が男なら、相手を殺したいと思うだろう」(63) という言葉はキャロラインとロバートにおける倒錯した愛情を表現している。ロバートのコリンへの愛情も同様に支配欲であり、サディスティックな殺したい欲望の表われと解釈できる。

殺害に至る場面で、コリンはロバートに壁に押しつけられ、動けなくなっていたが、薬を飲まされたメアリが口も体も動かず、意識が朦朧としているのを心配して、「おまえの望むことを何だってやる、だけど、メアリは医者に連れて行ってくれ」(120) とロバートに言ったことで、「好きな人のためなら、どんなことでもする」というキャロラインの言葉と同じ意味になってしまう。その直後に、ロバートがコリンの手首を剃刀で切ったのは当然のことだろう。

自ら、父権制存続を果たせないゆえに、ロバートは愛する者を傷つけることによって男である自分の支配を自己確認し、自分の存在証明をするしかない。同じことを続けても永遠に充足することはなく、逃避することもできない。なぜならロバートは自己のうちにバラドックスを内包するダブルバインドを表わしているからである。言い換えれば、父権制の価値観に依存しながら、父権制の基盤といえる存続のための資質をもたないというダブルバインドのうちにある。

またラカンのいうように、コリン殺害によって、コリンの欲望は他者の欲望として表われているといえる。

結　　び

ロバートのコリン殺害の理由はコリンを愛しているから殺すというサディスティックな同性愛にあった。さらに、サディスティックな性癖を支えているのは古い父権制社会における価値観であった。コリンとメアリはもちろん破壊的な父権制の犠牲者である。他方、ロバートとキャロラインも父権制の犠牲者といえると思う。父権制社会の根幹をなす男から男への継承、存続ができない場合、ロバートのように異常な形で、支配する男としての自己確認を図るしか

い。

また、意識主体のコリンとメアリによって抑圧された無意識における他者、シニフィエとは破壊的な父権制であり、ロバートとキャロラインであった。コリン殺害はメア리를助けたいコリンの欲望が他者の、すなわちロバートの欲望であることを表わしている。

マキューアンはこのテキストによって父権制の危険を示し、性のヒエラルキーに基づいた社会から生まれるのは妄想や腐敗しかないと表明した。そして、フェミニズムに父権制にとって代わる、対抗できる可能性を求めている¹³⁾。

註

- 1) 使用したテキストは Ian McEwan, *The Comfort of Strangers* (London: Picador, 1981)。引用文の頁数はこの版によるものとし、本文中にかっこに入れて示す。
- 2) Hal May (ed.), *Contemporary Authors: New Revision Series*, Vol. 14 (Detroit: Gale Research Company, 1985), 323.
- 3) Jack Slay, Jr., *Ian McEwan* (New York: Twayne Publishers, 1996), 72.
- 4) Douglas Dunn, "In the Vale of Tears," *Encounter* (January 1982): 51.
他に Lewis Jones も "his psychic fable in Venice" と断言している。
Lewis Jones, "More Filth," *Spectator*, 24 October 1981, 24.
- 5) Jack Slay, Jr., 73.
- 6) Ibid., 79.
- 7) Ibid., 74.
- 8) ジャック・ラカンの無意識の定義と文学との関係から、特に次の Ben Stoltzfus, *Lacan and Literature* (Albany: State University of New York Press, 1996), 1-14.
岸田秀訳, ジャンーミシェル・パルミエ, 『ラカン—象徴的なものと想像的なもの』(青土社, 1993)を参照した。
- 9) Adrienne Rich, *Of Woman Born—Motherhood as Experience and Institution* (New York: W.W. Norton & Company, 1986), 253.
- 10) Jack Slay, Jr., 83.
- 11) ジュディス・グラハムは女にはマゾヒスティックな幻想があるというマキューアンの見解に非難が集まったこと、特に彼をフェミニストとして支持していた人々から批判されたことを紹介している。
Judith Graham (ed.), *Current Biography Yearbook* 1993 (New York: The H.W. Wilson Company, 1993), 390.
- 12) スレイは「ロバートの支配欲は性的な欲望ではなく、殺人のスリルを求めるので、殺害するのは男でも女でも構わない」と述べるが、不可解なコリン殺害の説明としては不十分である。また、スレイはコリン殺害の重要な要因と思えるロバートのホモセクシャルについて全く言及していない。
Jack Slay, Jr., 85.
- 13) スレイはマキューアンがこのあとの作品でも女性を肯定的に描いていると擁護している。
Ibid., 88.

An Essay on Ian McEwan's *The Comfort of Strangers*
—Desire of the Other Signified by Patriarchy—

TAKEOKA Chiyo

The murder in a climax of *The Comfort of Strangers* shows a destructive patriarchy that demands the subservience of females. Assuming that this text is a dream, in which conscious discourse (the signifiers) resolves into metaphor and metonymy (the signified) in the unconscious, Colin and Mary are thought as the former and Robert and Caroline as the latter. Robert and Caroline, a sado-masochistic couple, are regarded as an embodiment of male chauvanism and subservience in patriarchy. On the other hand, Colin and Mary are feminists who don't set any value on a sexual hierarchy. However, the murder of Colin is not caused by the opposition between two couples, but by Robert's impossibility of self-identification as a male and his homosexuality for Colin. The murder means the only way of his male-dominance in the double bind, and implies his sadistic desire that he wants to kill his lover. And Colin's desire to save Mary's life in the climax is to desire the Other's one in the unconscious by Lacanian theory.

(本学非常勤講師)